

最優秀賞

— 高校生の部 —

「みんなが集う場所」

玉木まりあさん

推し本:『しずかな日々』

著: 柳月美智子

推したい相手: 人生の選択を迷って悩んでいる人

QuizKnock
山本祥彰

審査員コメント

過ごした日々が、一度読んだはずの本をより鮮明に生々しく見せたのですね。玉木さんが『しずかな日々』を拠り所としたように、この文章自体さえも誰かの拠り所になるだろう、と思わせてくれる作品でした。

「みんなが集う場所」 玉木まりあ

ラスト一行。読み終えて、大きな息をつく。こんなに感動する小説だったっけー。私はこの本を小学校五年生の時に読んだきり、高校生になるまで開かなかった。当時親に勧められて読んだ時には、同世代の男の子が、ただそこにいるだけだった。しかし、今読んだら違った。そこにいる男の子が、まぶしかった。この本は、主人公である枝田光輝の小学校五年生の一年間が主に描かれている。クラス替えの直後に、同じクラスの押野が声をかけてくる。それを機に光輝は、母と二人だけだった世界をどんどんと広げていく。押野が誘ってくれた三丁目の空き地に毎日通うようになった。しかし、ようやくそのことに馴染んだ頃に、母の仕事の都合で転校せざるを得なくなる。光輝は母の新しい仕事に疑念を抱いており、張り切る母とは対照に母親に反抗していく。転校したくないと言い張る光輝は、とうとう母と離れておじいさんの家から学校に通うことになった。そこから夏休みを通して、さらに成長していく光輝が描かれていく。光輝は小学校五年生になってから、前々から疑問に思っていた家のことを、母親に当たりながら、外の世界にぶつけていく。光輝が初めて母に対してこうした行動を取る姿に、私は懐かしさを覚えた。大人の力には抗えないと分かっているけど、背伸びして大人と同等の人物になろうとする光輝の姿が頼もしく思えた。ふと、この頃に私がよく親から言われていた言葉を思い出した。親の言うとおりにしていれば、この先絶対に良かったと思えるから。自我を張らずに、私たちが言っている方にしなさい。非力だったあの頃は、私も親の意見に従ってい

た。しかしそれから、自分の意見を押し殺すようになってしまった。良い言い方をすれば、親を信じていた。しかし、親や周囲に頼りすぎていたのだろう。高校生になった今は、自分で将来を見据えて進路を決めていかなければならなくなった。あの頃のように自分の意見を、勇気を持ってはっきりと言えるようになりたいと思った。光輝はまた、母と二人だけの世界から広い世界へと、どんどんと飛び出していく。友達という大きい存在に気づき、自身の新しい面を見つけていく。大人になった光輝はこのことを人生のターニングポイントと話している。考えてみると私も、今の私があるのは光輝と同じ歳の時に、大きく自分の世界が広がったからだ気づいた。だから、新しいものに出会った時の光輝の心のときめきがよく分かった。私自身、小学校五年生の時に初めて学習塾に通った。そこで出来た友達は学校の友達とはまた違った。違う環境の中に自分の身を置いて勉強していることに始めのうちは慣れなかったが、ある日同じクラスの女の子に声をかけられて世界は変わった。その子を介して初めて、塾が楽しい場所に変化した。同じレベルで似たような家庭環境で育ってきた子ばかりであったから、驚くほど話が合った。学校帰りに塾に行くまでが、とてもわくわくした時間だった。一方で、中学生になって高校受験をすることになった時、小学生の時とは違い、周りに誰も友達がいない状況で塾通いをするようになった。不安に陥ってもそれをこぼす相手がいなかった。その時に、友達はどんな力にも勝るものだと感じたのを思い出した。私も光輝と同じ歳で似たような経験をしたのだと気づいたから、小学校五年生の時よりも光輝の想いに共感できたのかもしれない。小学校五年生は年齢でいうと、十歳である。大人と子どもの狭間で揺れ動き、悩み始めた時期だと思う。光輝もこの悩みを抱えているシーンが小説の所々に隠れている。大人と同じように扱ってほしいけれど、自分の決定力や心はまだまだ子どもであること。それに気づく光輝の姿がいろんな描写で書かれている。特に、光輝の母がおじいさんの家で開かれた光輝の誕生日会のシーンの会話が印象に残っている。母がいると気づまりになると思いながら、母からおじいさんの家に泊まらずにそのまま帰ってしまうことを聞いた時、光輝は寂しく思う。母親と一緒に暮らしていくことをどんなに嫌がっていても、離れていると寂しく思う自分がどこかにいる。大人になれる一歩手前には、まるで空虚なポケットがあるようだった。私は、この本を五年ぶりにもう一度読んで、光輝が広い世界に出会って変わっていく姿や親に反抗していく姿に、自身の同じ頃のことを思い出し、さらには、今の自分があるのには何が大きく関わっていたのかを考える機会となった。私はあの頃のように精一杯自分の道を拓こうとしているのかを、問い直せたような気がした。私はこの本を、人生の選択を迷っている人に、推したい。私がこの本に戻ってきたように、世界中の人に自身の今までの人生を振り返る機会として、この本を読んで欲しい。光輝の世界を変えた、あの三丁目の空き地に、みんなは集まってくるのだ。